



シリーズ第3回

LNGカナダプロジェクト

# カナダ産シェールガスを日本へ LNGを両国の新しい懸け橋に

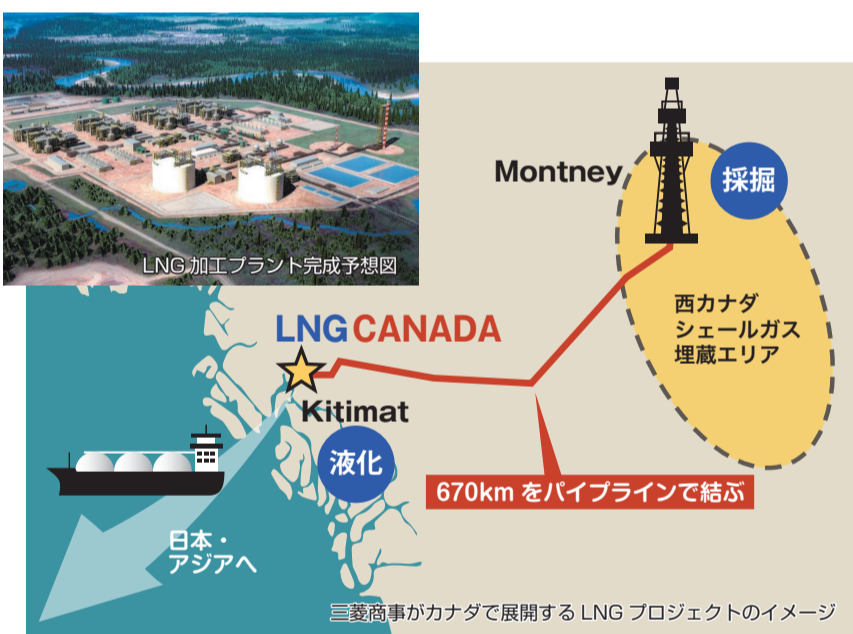
三菱商事グループが世界中で取り組む事業とそこで奮闘する社員を紹介するシリーズ。第3回はシェールガスの本場・カナダで、日本などアジア市場に向け液化天然ガス(LNG)の長期安定供給を目指す大規模プロジェクト「LNGカナダ」にフォーカスする。国籍が異なる5企業の合弁会社を取りまとめ、事業展開をけん引する山本仁の挑戦取材した。

## カナダ最大規模のLNG輸出プロジェクトが本格始動

持続可能な社会の構築に向け、エネルギー供給の多様化を求める機運が地球規模で高まる中、より二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)排出量の少ない化石燃料として世界的に長期の需要の伸びが期待できる天然ガス。そんな中、新たな調達先として三菱商事が着目したのが、カナダのシェールガスだ。約50年に及ぶLNG事業の経験を生かして進めてきたプロジェクトが今秋本格的に始動した。

10月2日、三菱商事、シェル、マレーシア・中国・韓国の国営エネルギー企業の5社が共同出資するLNGカナダデベロプメント社(LNGカナダ)が最終投資決定を発表、カナダ西海岸ブリティッシュ・コロンビア州のキティマツトに年間1400万トンの生産能力を持つLNGプラントを建設し、2020年代半ばから日本などアジアを中心に輸出開始を目指していく。

三菱商事は内陸のモントニーで採掘した天然ガスをパイプライン



## 経営陣唯一の日本人として出向 多国籍の専門人材を結ぶ

実は山本が赴任する前の16年にプロジェクトは油価下落などで最終投資決定が延期された。しかしこのプロジェクトは、シェールガス革命で米国への資源輸出が減少するカナダにとっても、新たな輸出先を確保するための重要な事業。国や地域の熱意と支援、およびLNGの需要拡大がもたらす長期にわたる収益性が評価され、満を持して最終投資決定に至った。

限られた人員の中、調査資料準備プロジェクト株主との調整などに明け暮れる日々を送っていた山本は、投資決定の報に、「ようやくスタートラインに立った。プラント建設が始まるこれから勝負。スケジューリング、予算通りに生産・輸出が始まるまでは気が抜けない」とコメントしながらも笑顔を見せた。山本のポジションは、資源開発



バンクーバーで行われた署名式にはトルドー首相も出席

とプラント建設に関して百戦錬磨の人材が集結する社内、そうした人材を束ね、計画に沿って事業を推進していく役割だ。「複数の拠点に散らばる人たちをつかまえて話をするのが結構大変」と語る。機能別に世界中に分かれている拠点の間で、距離と時差を超えて迅速にコミュニケーションを取り、プロジェクトを円滑に進める必要があるからだ。同僚から「ジンはいつも走り回っている」といわれる山本は、メールやチャットを駆使しながらも、対面コミュニケーションを心がける。

## カナダの新産業発展に寄与し 日本のエネルギー安定供給へ貢献

10月以降、プロジェクトは一気に動き出している。プラント建設工事はすでに始まり、パイプライン敷設工事も着々と進む。1カ月で社員は倍に増えた。LNG生産ラインが稼働すれば、当面は年間約210万トンの日本に輸出される予定だ。「このプロジェクトは日本のエネルギー安定供給に資するだけでなく、長期にわたって地元経済の基盤となり、カナダの国益にもかなうもの。遅滞なく実現に導かななくてはならない。会社がどんどん拡大、変化していく中での取り扱いがますます重要だ」と山本。

高校時代までを米国で生活した山本は、日本人としてのアイデンティティを大事にしたいと大学時代を日本で過ごし、「資源ビジネスを通じて、日本や世界に貢献したい」と三菱商事を志望した。この事業を手掛けることで「日本とカナダの懸け橋になりたい」と力を込める。



顔を突き合わせたコミュニケーションを重視する

さらに「新興国ではまだまだ石炭火力発電が主流。将来的にそのエネルギーをLNGに替える手伝いができればうれしい。これから先の地球もまだまだいいところであってほしい」と夢を語る。山本の挑戦が尽きることはなさそうだ。

## 取材を終えて

空港から森の中の道を1時間、人口8000人の町、キティマツトに着く。プロジェクトには大勢の市民が関わる。歓迎の意を込めて行われた祭りのにぎわいに期待を肌で感じた。カナダのインフラ事業

では先住民の理解が不可欠で、記者会見で「子ども、ひ孫の分まで代弁して感謝する」と先住民の長が述べた言葉に山本さんは大いに力づけられたという。カナダ産のLNGが海を越え、我々のライフラインとなる日に思いを寄せた。